The Society for 17th-Century English Literature
十七世紀英文学会ニューズレター（2024 年度 第 1 号）
本部事務局　〒577- 0813 東大阪市新上小阪 228-3　近畿大学 B 館 経済学部 2G (金﨑) 研究室内

会　長　挨　拶

岩永　弘人

新会長を仰せつかりました岩永です。私の世代は人材不足なのか、今回浅学の私に会長職が回ってまいりました。支部内外でご不満の方も多くいらっしゃるかと思いますが、しばらくの間おつきあい下さい。

会長に就任させていただいてから、活動方針のようなものをいろいろと考えてみたのですがなかなか思いつかず、結局月並みながら「伝統と変革」にしようと思います。言いかえますと、これまで３支部を育ててこられた先輩方のご苦労を引き継ぎつつ、コロナ後の新たな枠組みの中で学会活動をどのように展開していくか、と言う点が直近の課題かと考えた次第です。特に文化系の大学院生の数が減少する中、各支部でいかにして新会員をふやし、次の世代にバトンを渡していくかが大きな課題であると実感しています。そして、そのためには、３つの支部が多様性の中で統一感を持たねばならないと考えます。これも月並みでカッコよすぎますが Concordia Discors といったところでしょうか。その多様性の一方で、魅力的で、わかりやすい学会をめざす必要がある事も忘れてならないと思います。

本学会はいろいろな意味でユニークな学会です。３つの支部がそれぞれ独立して活動していること。定期的に出版される独自の論集を持っていること。このような大きな特徴を生かして本学会をさらに発展させていけるよう、微力ながら頑張る所存です。各支部の会員の皆様のご協力、どうぞよろしくお願い申し上げます。

1．ホームページおよびツイッターのお知らせ

当学会のホームページ(HP）は金星堂のご協力のもとに学会 HP 委員が運営・管理しております。

http://www.kinsei-do.co.jp/S17CEL/

「会員による新刊情報」や「会員による最新研究情報」などの HP 掲載データは年２回更新します。原則として４月末に各支部事務局、11 月末にホームページ委員が、掲載データを取りまとめます。研究業績を内外に知らせる良い機会となりますので、最新データの提出にご協力をお願いいたします。

また、学会 X（旧ツイッター、十七世紀英文学会（公式）@S17CEL）ではホームページよりも早く最新情報を掲載しています。フォローおよび最新情報のご確認を随時お願いいたします。

教員公募情報受け付けおよびツイッター配信のお知らせ

学会 X（旧ツイッター）では、国公立私立の大学、短大、それに準じる教育・研究機関から当学会に寄せられた英語英文学関係専任職の公募情報を配信しております。情報をお寄せいただいた順に、大学の公募ホームページあるいは研究者人材データベース（JREC-IN）へのリンクを掲載いたします。掲載を希望される場合には、本部事務局宛てにメールにて応募締め切りとともにお知らせください。なお、ウェブサイトへのリンクがない場合は、PDF データを添付ファイルにてお送りください。

2．メールでのお知らせについて

本部事務局から各支部事務局のメーリングリストを通じてお知らせを配信することがあります。支部事務局からのメール連絡が届いていない方は、各支部事務局の担当者にメールにてお知らせください。担当者は本 Newsletter 末尾に記載されております。

3．編集委員会からのお知らせ――論集 21 巻『十七世紀英文学と世界』について

既に HP、各支部 ML 等で周知しておりましたように、第 21 巻のテーマは『十七世紀英文学と世界』（*Seventeenth Century English Literature and the Worlds*）となりました。近年、グローバルな広がりの中で十七世紀英文学を捉える研究が増えていることもありますが、同時に、現代社会における自国中心主義、他国・他民族への侵略などの状況に、文学研究がどのように応答できるかということも意識しました。本巻から新たに執筆希望をとる方式を採用し、若手研究者からベテラン研究者まで多くの方々から執筆希望をいただきました。今後は、執筆希望をいただいた方々から、**2025 年 3 月 31** 日締め切りで原稿をお寄せいただき、**2025 年 8 月 30 日**に 21 巻を発刊する予定となっております。会員の皆様にはぜひ楽しみにお待ちいただければと思います。論集 21 巻が刊行にされましたあかつきには、次の 3

点について会員の皆様にご理解をお願いいたします。

1． 執筆者は各自 5 冊のご購入をお願いします。

2． 執筆者以外の会員は、各人 1 冊ご購入をお願いします。所属大学の図書館でのご購入も積極的にご検討ください。 なお、執筆者の方は、5 冊ご購入とは別に執筆料として各自 1 万円のご負担をお願いします（学生会員は負担無し）。

3． 金星堂のテキストを可能な限りご採用ください。

4．全国大会・総会について

今年度の全国大会（第 12 回大会）および総会は、**2024 年 9 月 14 日（土）**に関西学院大学大阪梅田キャンパスにて開催予定しております。また、懇親会も開催予定しております。ふるってご参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

5．会計報告（速報版）

2023 年度の会計報告を以下に記します。会員の皆様には会費納入へのご協力をお願い申し上げます。

2023 年度（2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日）

収入		支出	
前年度からの繰り越し	1,235,169	通信・事務費（封筒・切手・振込手数料）	27,684
論集２０号執筆料	120,000	論集２０号学会分担金	400,000
会費収入　東北支部	48,000	HP 更新費用	39,600
東京支部	171,000	振込手数料	430
関西支部	99,000		
懇親会余剰金	2,500		
郵便貯金利子	13		
計	1,675,682	計	467.614

次年度繰越金　1,208,068 円　（2024 年 5 月 13 日）

*正式な会計監査付きの資料は総会資料としてあらためて配布いたします。

6．2023 年度支部活動報告

東北支部　活動報告・発表要旨

2023 年 8 月 9 日	**佐々木 和貴**	**『尺には尺を』の仕掛けを読む**
2024 年 3 月 23 日	**菅野　智城**	**ハートリブ・サークルをめぐる２つの教育パンフレット ——ものづくりと人文主義**

『尺には尺を』の仕掛けを読む

佐々木　和貴

『尺には尺を』は「問題劇」というカテゴリーで論じられることが多く、喜劇としての評価はいまだ定まっていない。それは、風刺と笑劇が混在し、寓意的かと思えば時事的でもあり、しかも悲劇的展開が最後でロマンティック・コメディに切り替わるなど、通常のシェイクスピア喜劇の枠組みに収めるのが難しいからだろう。本発表の目的は、当時国王一座の最大のライヴァルだった少年劇団のレパートリーを取り込みながら、シェイクスピアが「風刺喜劇」から「ロマンティック・コメディ」への書き換えを試みたのではないかという仮説に基づき、『尺には尺を』のジャンル混淆的な特質を肯定的に「読み替え」る視点を提示することにあった。具体的には、「変換／交換」という意匠に着目しながら主要登場人物を分析することで、シェイクスピアが、どのような仕掛けによって、苦くて（＝風刺喜劇）甘い（=ロマンティック・コメディ)、深刻なのに（＝復讐劇）笑える（＝笑劇)、いわばジャンルの見本市のようなこの喜劇を生み出したのかを解明し、その特色と魅力を指摘した。

主要参考文献

Primary Sources

Bawcutt, N.W., editor. *Measure for Measure* (The Oxford Shakespeare). Oxford University Press, 1991.

Braunmuller, A.R. and Robert N. Watson, editors. *Measure for Measure* (The Arden Shakespeare Third Series). Bloomsbury, 2020.

Bullough, Geoffrey, editor. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare, Vol. II: The Comedies, 1597-1603.* Routledge and Kegan Paul, 1963.

Secondary Sources

Adelman, Janet. ‘Bed Tricks: On Marriage as the End of Comedy in *All’s Well That Ends Well* and *Measure for Measure*.’ *Shakespeare’s Personality*, edited by Norman Holland, Sidney Homan, and Bernard Paris, University of California Press, 1989, pp. 151–74.

Boas, Frederick S. *Shakespeare and his Predecessors.* C. Scribner's sons, 1900.

Desens, Marliss C. *The bed-trick in English Renaissance Drama: Explorations in Gender, Sexuality, and Power.* University of Delaware Press.1994.

Dollimore, Jonathan. ‘Transgression and Surveillance in *Measure for Measure.*’ *Political Shakespeare: New Essays*

in Cultural Materialism, edited by Jonathan Dollimore and Alan Sinfield, Cornell University Press, 1985. pp. 72–87.
Greenblatt, Stephen. *Shakespearean Negotiations.* University of California Press, 1988.
Quarmby, Kevin A. *The Disguised Ruler in Shakespeare and his Contemporaries.* Routledge, 2012.
Shapiro, Michael. *Children of the Revels: The Boy Companies of Shakespeare's Time and their Plays*. Columbia UP, 1977.
Tennenhouse, Leonard. *Power on Display: The Politics of Shakespeare's Genres.* Methuen, 1986.

ハートリブ・サークルをめぐる２つの教育パンフレット
――ものづくりと人文主義

菅野　智城

本発表では、ハートリブ・サークルから出版された教育パンフレットのうち、ウィリアム・ペティの『提言』（*The Advice of William Petty to Mr. Samuel Hartlib for the Advancement of Some Particular Parts of Learning*, 1648 年）とジョン・ミルトンの『教育論』（*Of Education*, 1644 年）に焦点をあて、ペティのものづくり教育とミルトンの人文主義的教育を検証するとともに、両者に共通する知的エリートとしての側面と、異なる立場の教育パンフレットを出版したハートリブの思惑について考察を加えた。

ハートリブ・サークルの情報局構想（the Office of Address）に賛同するペティの『提言』は、貧民層の救済、才能や技術の発掘と共有、技術者養成による社会全体の利益創出を目的とし、知覚による観察を重視する体験学習的なカリキュラムを展開している。さらに三つの教育（学問）施設、Ergastula Literaria（読み書きの作業場）、Gymnasium Mechanicum（技術の修練場）、Nosocomium Academicum（学術院）の設置を提案し、知識の習得、技術（機械学）を基盤とするコミュニティの展開、そして最終的には “the epitome or abstract of the whole world”（世界の縮図）のような科学技術アカデミー構想を打ち出している。ペティは自然科学を中心とする実践教育プランを提案してはいるとはいえ、読み書きそれ自体を理解できて当然のものと位置づける姿勢には知的エリートとしての側面がうかがえる。

一方、ミルトンの『教育論』は国家のリーダー育成を目的とするエリート教育論であり、プライベートアカデミー構想を打ち出している。各学問（学科）のカリキュラムはギリシア・ラテンの古典の著作の列挙により展開している点で人文主義的な教育プランである。ハートリブの要請により『教育論』を執筆したミルトンは教育の分野での仕事には積極的ではなかったが、ウェブスターの言うように、ハートリブ・サークルから出版された一連の教育パンフレットのなかでも『教育論』が他を凌駕しているのは、内容の普遍性もさることながら、ミルトンのペンの力によるものであろう。

立場の異なる教育パンフレットの出版には、教育改革の原則については知名度の高いミルトンを取り込み、自身のサークルの考えを支持する教育改革案については気鋭の学者であったペティの才能を見込んだハートリブ自身の出版人・後見人としての手腕を見ることができるのである。

主要参考文献

Beer, Anna. *Milton: Poet, Pamphleteer and Patriot*. Bloomsbury. 2008.

Fitzmaurice, Edmund. *The Life of Sir William Petty*, 1623-1687. John Murray, 1895. Reprinted by Legare Street Press, 2022.

Greengrass, M., Leslie, M. and Hannon, M. *The Hartlib Papers*. The Digital Humanities Institute, University of Sheffield, 2013. [available at: https://www.dhi.ac.uk/hartlib].

Hill, Christopher. *Milton and the English Revolution*. Viking, 1978.

Lewalski, Barbara K. *The Life of John Milton: A Critical Biography*. Blackwell. 2000.

McCormick, Ted. *William Petty: And the Ambitions of Political Arithmetic*. Oxford UP. 2009.

Milton, John. *Complete Prose Works of John Milton*. Gen. ed. Don M. Wolfe. Vol. 2. Yale UP. 1959.

Petty, William. *The Advice of W. P. to Mr. Samuel Hartlib, for the Advancement of some particular Parts of Learning*. London: [s.n.], 1647[1648].
[available at: https://quod.lib.umich.edu/cgi/t/text/text-idx?c=eebo;idno=A54605.0001.001].

Turnbull, G. H. *Hartlib Dury and Comenius: Gleanings from Hartlib Papers*. UP of Liverpool, 1947.

Webster, Charles. *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*. Cambridge UP, 1970.

大倉正雄「ウィリアム・ペティと経済科学の曙（1)」『拓殖大学論集　政治・経済・法律研究』第 23 巻第 2 号（2021 年），41-96 頁.

ストーン，ローレンス『エリートの攻防：イギリス教育改革史』佐田玄治訳 御茶の水書房，1985 年.

相馬伸一『教育思想とデカルト哲学―ハートリブ・サークル　知の連関』ミネルヴァ書房，2001 年.

東京支部　活動報告・発表要旨

2023 年 7 月 15 日	神山さふみ	『終わりよければすべてよし』の結婚表象 ――ヘレンの「貞淑」に注目して
2024 年 3 月 23 日	伊澤高志	ネイハム・テイトとジョン・デニスの『コリオレイナス』改作
2024 年 3 月 23 日	――	17 世紀研究　この一冊

『終わりよければすべてよし』の結婚表象
――ヘレンの「貞淑」に注目して

神山　さふみ

本発表では、シェイクスピア喜劇『終わりよければすべてよし』(1605) を対象として、初期スチュアート朝の王権理念がヘレンの結婚に至るまでのプロセスにどのように影響を与えているのか、について検証した。そして、国王とダイアナそれぞれと親密な関係を築き、助力を得て、バートラムとの結婚を完成させるバイセクシュアルなヘレンであるが、家父長制から見れば「貞淑 (chastity)」な女性である、

という仕掛けを指摘した。

まず、ヘレンの人物像を同時代の社会背景から考察し、ヘレンの自己実現は、初期スチュアート朝の王権理念を反映している点を確認した。ヘレンの結婚観の変容は宇宙論によって表現されているが、天動説 (神/法王を頂点とする不動固定の階層秩序) から地動説 (太陽/国王中心の王権理念) へと移行していた現実世界の価値観の変容と合致している。イングランドは宗教改革後、特殊な王権理念を発展させてきたが、更にジェイムズ一世は絶対王政を推し進め自らを神と呼んだ。いわば中世では遥か遠くにいた神が身近な存在になり、「国王の前では皆平等」という観念が現出した。貧しい医者の娘ヘレンが直接国王と交渉し、国王の寵愛を受け、その力によって願いを叶えるという筋書きは、新しい王権理念の具現化である。

次に、ヘレンが「貞淑」であることを二つの場面から検証した。まず治療の場は、ヘレンが瘻腔の治療に併せて国王に処女を捧げる淫らで高揚した場面である。ところがこの後、夫バートラムに捨てられ、巡礼に身をやつしたヘレンは、「彼女の取柄は貞淑」というラベルを自分自身に貼りつける。この仕掛けによって、宮廷でのヘレンの行為は「不貞 (fornication)」と見做されず、家父長制が維持されることを確認した。さらに、ヘレンとダイアナの結託の場においては、クィア研究の領域で女同士の親密な関係が指摘されているが、同時代、女同士のホモエロティシズムは、「不貞」とは見做されず、家父長制 (長子相続性) を強化する慣習であった。かくしてヘレンは肉体的にはバイセクシュアルだが家父長制の視座から見れば「貞淑」な女性として生み出されている、という両義性を指摘した。

『終わりよければすべてよし』は、ほかのシェイクスピア喜劇とは異なり、秩序に収束しない点が特異である。国王が王権によって恣意的に階層秩序の流動性を促したこの劇を、観客が「喜劇」として見ることができた特異な時代を象徴する劇であったといえるのではないだろうか。

主要参考文献

Cosman, Bard C. "*All's Well That Ends Well*: Shakespeare's Treatment of Anal Fistula." *Upstart Crow*, no. 19, 1999, 78-95.

Crawford, Julie. "*All's Well That Ends Well* Or, Is Marriage Always Already Heterosexual?" *Shakesqueer*, Duke UP, pp. 39-47.

Grant, Edward. *Planets. Stars, and Orbs: The Medieval Cosmos 1200-1687*, Cambridge UP, 1994. Boas, Frederick S. *Shakespeare and his Predecessors*, Gordian Press, 1868.

Green, William David. "Thomas Middleton and the Adaptation of Shakespeare: Late Jacobian Politics in Print and Performance, 1616–1623" (unpublished doctoral thesis, the University of Birmingham, Shakespeare Institute College Arts and Law, 2021).

King James VI, *The Trve Law of Free Monarchies* (1598), in *King James VI and I Political Writing*, edited by Johann P. Sommerville, Cambridge UP, 1994.

Shakespeare, William. *All's Well That Ends Well*, edited. by Suzanne Gossett and Helen Wilcox, Arden Shakespeare, The Third Series, Bloomsbury Publishing, 2020.

Wells, Stanley. *Shakespeare, Sex and Love*, Oxford UP, 2010.

杉浦裕子、「『チープサイドの貞淑な乙女』(1613) にみる生徒と教師のクィアなモーメント」、『甲南大學紀要』、文学編、173 (2023)、29-93.
中野春夫、「エリザベス朝演劇における天文学的想像力について」、『埼玉大学紀要』32 (1996)、99- 109.

ネイハム・テイトとジョン・デニスの『コリオレイナス』改作

伊澤　高志

本発表では、共和制ローマを舞台としたシェイクスピアの悲劇『コリオレイナス』と、その改作版であるネイハム・テイト（c.1652-1715)の *Ingratitude of a Common-Wealth: Or, the Fall of Caius Martius Coriolanus* （1682 年初演）およびジョン・デニス（1658-1734）の *The Invader of His Country, or The Fatal Resentment*（1719 年初演）について、主に両作品をとりまく政治的文脈とそれぞれの改作の方向性を論じた。

まず両作品にかかわる政治的文脈としては、テイトの *Ingratitude* は 1670 年代末から 80 年代初頭の教皇主義者陰謀事件と王位継承排除危機、デニスの *Invader* は 1715 年の第 1 次ジャコバイトの乱を背景としていることが明確である。テイトは、コリオレイナス自身だけでなく、オーフィディアス、ヴァージリア、メニーニアス、そしてヤング・マーシアスに死を遂げさせ、さらにはヴォラムニアに発狂という結末を迎えさせ、英雄コリオレイナスに対するローマ共和国の忘恩が引き起こす内乱の恐ろしさを舞台上に表象する。それによって 1640 年代の内乱を想起させ、王位継承排除論者への警告としている。一方デニスは、その結末において、追放されたコリオレイナスがヴォルサイ人と手を結んで故国に帰還しようとしたことを念頭に、「外国」勢力を頼ってはいけないという教訓をコミニアスに述べさせている。観客は、フランスの支援を受けて帰還しようとした老僭王ジェイムズ・スチュアートを想起したであろう。

テイトもデニスも、それぞれの文脈において『コリオレイナス』を政治的に利用する可能性を引き出したが、その一方で両者には改作の方向性の大きな違いがある。先述のとおりテイトは凄惨な死の場面を増やしていることが最大の特徴である。それに対してデニスが重視しているのは「詩的正義」と感傷性である。前者についてはデニスのシェイクスピア批評において論じられており、その考えにしたがいデニスはふたりの護民官とオーフィディアスにふさわしい死を迎えさせている。後者については、とりわけコリオレイナスの追放および死の場面における妻ヴァージリアとの別離の場にあらわれている。どちらでもふたりは涙とともに長いキスを交わすのである。凄惨な死の連鎖からロマンチックな別れへという改作の結末の変化は、王政復古期から 18 世紀へという時代の変化をよく示していると言えるだろう。

主要参考文献

Dennis, John. *The Invader of his Country, or The Fatal Resentment*. Ed. Kristine Johanson. *Shakespeare Adaptations from the Early Eighteenth Century: Five Plays*. Fairleigh Dickinson University Press, 2014. 61-141.

Ripley, John. *Coriolanus on Stage in England and America, 1609-1994*. Associated University Presses, 1998.
Tate, Nahum. *The Ingratitude of a Common-Wealth*. Ed. Ruth McGugan. *Nahum Tate and the Coriolanus Tradition in English Drama with a Critical Edition of Tate's* The Ingratitude of a Common-Wealth. Garland Publishing, Inc, 1987. 1-107.
Wheeler, David. "To Their Own Purpose: The Treatment of *Coriolanus* in the Restoration and Eighteenth Century." Ed. David Wheeler. *Coriolanus: Critical Essays*. Routledge, 1995. 273-297.
圓月勝博「王政復古演劇批評」貴志哲雄監修『イギリス王政復古演劇案内』松柏社, 2009. 92-108.
佐々木和貴「王政復古演劇の展開」貴志哲雄監修『イギリス王政復古演劇案内』松柏社, 2009.112-122.
佐々木和貴「王政復古演劇から十八世紀演劇へ——ジョン・デニス小論」十七世紀英文学会編『十七世紀英文学と科学』金星堂, 2010. 227-247.

17 世紀研究　この 1 冊

東京支部では、2022 年度に続き例会における新たな試みとして、「17 世紀研究　この 1 冊」と題するセッションを設けた。今回も若手からベテランまでの参加があり、英語と日本語を問わず、各自の推薦する新旧さまざまな研究書をざっくばらんに紹介し合った。このような場を設けることで、見落としていた重要な研究書を知る機会になったり、思いがけない本との「出会い」があったりと、通常の研究発表やテーマを決めたシンポジウムなどとは異なった成果があった。（文責：伊澤高志）

関西支部　活動報告・発表要旨

2023 年 6 月 18 日	西田　侑記	**"In All Ty Great Britain"** **——『アイルランドの仮面劇』における他者表象の政治性再考**
2023 年 12 月 23 日	圓月　勝博	**アメリカがまだイギリスだった頃** **——17 世紀ピューリタン女性詩人アン・ブラッドストリート**
2024 年 3 月 23 日	大久保　友博	**妖猫 Graymalkin / Grimalkin の事情** **——*Macbeth* および *Beware the Cat* の周辺から**

"In All Ty Great Britain"
——『アイルランドの仮面劇』における他者表象の政治性再考

西田　侑記

1613/14 年のクリスマス・シーズン、国王ジェイムズ 1 世の寵臣であるサマセット伯ロバート・カーの結婚を記念して、絢爛豪華な一連の祝賀行事がロンドンで催された。そのうちの一つが、ベン・ジョンソンが台本執筆を担当した『アイルランドの仮面劇』である。この劇は、アイルランド貴族の一団がサマセット伯の婚礼を言祝ぐためにイングランド宮廷に伺候するという筋書きを持ち、上述の通り本来

は祝婚劇として上演されたものの、宮廷祝祭の中に文化的他者としてのアイルランド人を紛れ込ませた興味深いテクストでもあり、批評家の関心はむしろその点に向けられてきた。その結果、近年ではジョンソンのドラマツルギーの中に、宗主国イングランドの国家的イデオロギー戦略によって土着のアイルランド文化が収奪される過程を読み込むポスト植民地主義的な解釈がもはや定番となった感がある。

しかし、こうした見方は祝祭の主役であるカーの存在を後景化し、『アイルランドの仮面劇』が持つプライベートな祝婚劇としての側面を等閑視してしまう危険性がある。ましてや宮廷貴族の閉じた共同体の中で演じられる仮面劇だけに、寵臣カーの結婚というこの劇の特異な上演背景が、テクストの意味生成に及ぼす影響を無視するわけにはいかない。

このような問題意識を出発点として、本発表では『アイルランドの仮面劇』におけるアイルランド的他者の表象とスコットランド人カーの人種的・社会的アイデンティティーとの関連を考察し、劇中でのアイルランド人への眼差しが、ホワイトホール宮殿の異分子としてカーを他者化しようとする言説と相通ずる部分を含んでいる事実を指摘した。さらに、そうした文化的な差異を無効化する作為として、複合民族国家グレート・ブリテンという勃興的な国家概念の存在が示唆されていることを述べ、これがカーの他者性への不安に対するいわば安全弁としても機能している可能性を提示した。つまり、本発表の文脈から言えば、非イングランド的他者との接触と同化を舞台にかけた『アイルランドの仮面劇』は、スコットランド人ロバート・カーという他者が宮廷の中枢で跳梁跋扈する 1610 年代特有のイングランドの内情をアイルランドに投影するかたちで演劇化したテクストとして読み直すことができるのである。

主要参考文献

Bellany, Alastair. *The Politics of Court Scandal in Early Modern England: News Culture and the Overbury Affair, 1603-1660*. Cambridge UP, 2002.

Cuddy, Neil. “The Revival of the Entourage: The Bedchamber of James I, 1603-25.” *The English Court from the War of the Roses to the Civil War*, edited by David Starkey, Longman, 1987, pp. 173-225.

“Early Stuart Libels: An Edition of Poetry from Manuscript Sources.” Edited by Alastair Bellany and Andrew McRae. *Early Modern Literary Studies Text Series I*, 2005, http://purl.oclc.org/emls/texts/libels/. Accessed 20 Mar 2023.

Jonson, Ben. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, edited by David Bevington, Martin Butler and Ian Donaldson, 7 vols, Cambridge UP, 2012.

Knowles, James. *Politics and Political Culture in the Court Masque*. Palgrave Macmillan, 2015.

Lindley, David. “Embarrassing Ben: The Masques for Frances Howard.” *English Literary Renaissance*, vol. 16, no. 2, 1986, pp. 343-59.

Murphy, Andrew. *But the Irish Sea Betwixt Us: Ireland, Colonialism, and Renaissance Literature*. U of Kentucky P, 1999.

Shohet, Lauren. *Reading Masques: The English Masque and Public Culture in the Seventeenth Century*. Oxford UP, 2010.

Smith, James M. “Effaced History: Facing the Colonial Contexts of Ben Jonson’s *Irish Masque at Court*.” *English Literary History*, vol. 65, no. 2, 1998, pp. 297-321.

アメリカがまだイギリスだった頃

−17 世紀ピューリタン女性詩人アン・ブラッドストリート

圓月　勝博

1630 年、「丘の上の町」説教によってアメリカ建国精神の祖として今もなお記憶されているイギリス人マサチューセッツ湾植民地第 2 代総督ジョン・ウィンスロップが率いるアーベラ号に乗って、18 歳のイギリス人アン・ブラッドストリートが家族とともにアメリカ東海岸に入植した。第 2 代副総督トマス・ダドリーを父とし、第 20・21 代総督となるサイモン・ブラッドストリートを夫とするアンは、植民地経営を許可する勅許状を付与してくださったイギリス国王の権威を固く信じる理想の臣民として、正統的ピューリタン信仰を守るために異端者と戦う父を崇敬する理想の娘として、そして、義父に導かれて次世代リーダーとしての地歩を着々と固めていく夫に内助の功を尽くす理想の妻として、栄養も衛生も医療も劣悪極まりない新世界で感染病と戦いながら、人口不足という植民地最大の悩みのひとつを解消するため、8 人の子どもを産み育てるという異次元の少子化対策を実行に移し、長男を立派なイギリス人にするために本国留学に送り出した理想の母でもあった。それだけではない。1650 年にロンドンで出版されてアメリカ文学史上最初の詩集という栄誉を与えられることになる『10 番目の詩神』の作者でもあるのだ。ノーサンバランド公ジョン・ダドリーの血統を受け継ぐプロテスタント国家イギリス男性詩人サー・フィリップ・シドニーの愛国的騎士道精神に憧れたエドマンド・スペンサーに共感しながら、シドニーの同志フランス・ユグノー男性詩人ギヨーム・デュ・バルタスの長編宗教詩『聖なる週』のイギリス男性詩人ジョシュア・シルヴェスター訳のミルトニックな文体に規範を求める彼女の詩は、いつもトランスナショナルで、しばしばトランスアトランティックで、ときにはトランスジェンダーでさえある。

主要参考文献

Bradstreet, Anne. *The Works of Anne Bradstreet*. Edited by Jeannine Hensley. Foreword by Adrienne Rich. The Belknap P of Harvard UP, 1967.

Bremer, Francis J. *John Winthrop: America's Forgotten Founding Father*. Oxford UP, 2003.

Dryden, John. *The Works of John Dryden*. Edited by H. T. Swedenberg, et al. 20 vols. Berkeley: U of California P, 1956-2000.

Gordon, Charlotte. *Mistress Bradstreet: The Untold Life of America's First Poet*. Little, Brown and Company, 2004.

Hall, David D. *Puritans in the New World: A Critical Anthology*. Princeton UP, 2004.

---. *The Puritans: A Transatlantic History*. Princeton UP, 2019.

Hambrick-Stowe, Charles. *The Practice of Piety: Puritan Devotional Disciplines in Seventeenth-Century New England*. The U of North Carolina P, 1982.

Jones, Augustine. *The Life and Work of Thomas Dudley: The Second Governor of Massachusetts*. Houghton, Mifflin and Company, 1900.

Milton, John. *Complete Shorter Poems*. 2nd ed. Edited by John Carey. Longman, 1997.

---. *Paradise Lost*. 2nd ed. Edited by Alastair Fowler. Longman, 1998.
Piercy, Josephine K. *Anne Bradstreet*. Twayne, 1965.
Rebholz, Ronald A. *The Life of Fulke Greville: First Lord Brooke*. Clarendon P, 1971.
Rosenmeier, Rosamond. *Anne Bradstreet Revisited*. Twayne, 1991.
Sidney, Sir Philip. *The Poems of Sir Philip Sidney*. Edited by William A. Ringler, Jr. Clarendon P, 1962.
Spenser, Edmund. *The Yale Edition of the Shorter Poems of Edmund Spenser*. Edited by William A. Oram, et al. Yale UP, 1989.
Sylvester, Josuah, translator. *The Divine Weeks and Works of Guillaume de Saluste Sieur du Bartas*. Edited with Introduction and Commentary by Susan Snyder. Clarendon P, 1979. 2 vols.
Taylor, George Coffin. *Milton's Use of Du Bartas*. Harvard UP, 1934.
White, Elizabeth Wade. *Anne Bradstreet: The Tenth Muse*. Oxford UP, 1971.
Winship, Michael P. *Hot Protestants: A History of Puritanism in England and America*. Yale UP, 2018.
Winthrop, John. *The Journal of John Winthrop 1630-1649*. Edited by Richard S. Dunn, James Savage, and Laetitia Yeandle. The Belknap P of Harvard UP, 1996.

妖猫 Graymalkin / Grimalkin の事情

——*Macbeth* および *Beware the Cat* の周辺から

大久保　友博

『マクベス』1 幕 1 場において魔女の台詞で言及される“Gray-Malkin”は通例、注釈などでは猫の使い魔であると説明されるが、その解釈が定着している背景にはあまり注目が当たっていない。そこで初期の注釈を探してみると、1748 年にまず John Upton がト書きとしてその種の解釈を挿入しており、さらに 1753 年に Charlotte Lennox、1773 年に George Steevens が、それぞれ Upton の解釈に応答するように、補足情報を提供しているのが見つかった。

Lennox の参照する“Rutterkin”という猫は、“Witches of Belvoir”として 1619 年に断罪された Flower 母娘の飼っていた使い魔（とされた猫）のことで、その魔女裁判は記録パンフレットの流通などでよく知られた事項であったと思われ、Reginald Scot が 1584 年にまとめた魔女イメージ一般とも合致するものであった。

また George Steevens が名称の典拠として示した William Baldwin 作の *Beware the Cat*（1553 年）は、今では英語最初の散文創作物語と目されるものだが、その話の中でアイルランドの妖猫“Grimalkin”が幾たびも登場している。ここでは魔女とのつながりが登場人物たちによって疑われるものの、物語上はいわゆる化け猫であって、真名を Grimolochin という妖猫国の女王とされる。興味深いのは、現代の注釈で語源として説明される“gray”（形容詞）＋“malkin”（女性名）の組み合わせが今作ではあくまで俗説として扱われていることである。そしてこの作品以後は、使い魔というよりもむしろ“Grimalkin”は妖猫や雌猫を代表する名として引き合いに出されることが少なくない点も見逃せない。

Thomas Middleton が *Macbeth* に対して（とりわけ魔女関連の記述を中心として）加筆したという説に

従うならば、*Holinshed's Chronicles* では運命の三女神を連想させる三人の貴婦人を三人の魔女へと作り変えるために劇冒頭で使い魔の猫を登場させ、そこに自身の劇 *The Witch*（1616 年頃）の登場動物である魔女の使い魔“Malkin”と、Shakespeare 死後の時事的話題であった“Rutterkin”のイメージを重ね合わせた上で、妖猫として高名であった“Grimalkin”をも利用して、印象的な書き換えを狙ったという推測も成り立ちうるだろう。

主要参考文献

Clark, Sandra and Pamela Mason, eds. *Macbeth: The Arden Shakespeare Third Series*. London: Bloomsbury, 2015.

Holinshed's Chronicles. London: British Library, n.d. [https://www.bl.uk/collectionitems/holinsheds-chronicles-1577]

Johnson, Samuel and George Steevens, eds. *The Plays of William Shakespeare, Vol.4*. London: Bathurst, 1773.

Lennox, Charlotte. *Shakespear Illustrated*. New York: AMS Press, 1973.

Ringler Jr., William A. and Michael Flachmann, eds. *Beware the Cat by Willam Baldwin: The First English Novel*. San Marino: Huntington Library, 1988.

Scot, Reginald. *The Discoverie of Witchcraft*. New York: Dover, 1972.

Taylor, Gary, and John Lavagnino, eds. *Thomas Middleton: The Collected Works*. Oxford: Clarendon, 2007.

Upton, John. *Critical Observations on Shakespeare: The Second Edition, with Alterations and Additions*. London: Hawkins, 1748.

The Wonderful Discoverie of the Witchcrafts of Margaret and Phillip Flower. London: Barnes, 1619.

大久保友博「知られざる物語—小説の源流をたずねて：ボールドウィン『猫にご用心』解説（１）」『Soyogo』日本印刷、2022　[https://soyogobooks.jp/essays-and-more/119/]

野上豊一郎訳『マクベス』（岩波文庫［改版］）岩波書店、1958

7. 担　当

＊本部事務局：金﨑 八重

＊本部会計：友田 奈津子

＊東北支部事務局：川田 潤

＊東京支部事務局：伊澤 高志

＊関西支部事務局：西野 友一朗

＊学会ホームページ委員：柴田 尚子

十七世紀英文学会規約

（名称）

１　本会は十七世紀英文学会と称する。

（目的）

２　本会は十七世紀英文学の研究を促進し、あわせて会員相互の連絡をはかることを目的とする。

（会の活動）

３　本会に本部と支部を置く。各支部は年数回の談話会等を開いて会員の発表・報告を聞き、研究情報等を交換する。

(2)本部は総会を開いて重要事項を決定すると共に「ニューズレター」の編集刊行をする。

(3)各支部は相互交流のために、年一回、談話会等に他支部所属会員を招聘することができる。その際には、本部会計より旅費（一律２万円）を補助するものとする。

（会員）

４　入会希望者は、各支部または本部に申し込んで会員となることができる。

（会長）

５　本会に会長をおく。

(2)会長は会員の互選により総会で決定する。

(3)会長の任期は２年とする。再任は妨げないが、再任は１回限りとする。

（顧問）

６　本会に顧問をおくことがある。

(2)顧問は会員の総意により総会において委嘱する。

（組織および会の運営）

７　本会は会長の他に次の役員をおく。

本部幹事若干名　　支部幹事各２名

編集顧問　　編集委員若干名

会計監査２名　　ホームページ委員１名

(2)本部幹事は会員の互選により総会で決定し、支部幹事と合議の上で本会の運営にあたる。

(3)支部幹事は各支部で選出し、本部に報告する。支部幹事は支部の運営の他に本部との連絡にあたる。なお、本部幹事と支部幹事が重複することは差支えない。

(4)編集顧問は編集委員会が委嘱する。

(5)編集委員は、当分の間、各支部より２名選出するが、東京支部は３名とする。編集委員は編集会議を開き、「論集」の編集にあたる。なお、「論集」編集規定は別に定める。

(6)ホームページ委員は学会ホームページの管理・運営にあたる。

（会計）

８ 本学会の経費は会費、寄付金その他の収入をもってこれにあてる。

(2)会費は年額、本部会費3,000円、各支部会費（東京支部500円（学生会員を除く）、関西支部1,000円（学生会員を除く））とし、あわせて支部に納入する。本部会費3,000円は各支部により本部へ送付するものとする。

(3)本部会計の決算報告は翌年度の総会において行なう。

(4)会計年度は４月１日に始まり、翌年３月３１日までとする。

(5)本部会計は本部幹事がこれを統括し、会計監査がこれを監査する。

（規約の発効）

９ 本規約は１９８４年５月１２日より発効する。

（規約の改正）

１０ 本規約は改正の要が生じた時は総会においてはかる。

付則　本部所在地

本部の所在地は次のとおりである。

〒577- 0813 東大阪市新上小阪228-3

近畿大学B館 経済学部 2G (金﨑) 研究室 内

1988年5月21日一部改正／1989年5月20日一部改正／1996年5月25日一部改正／2010年5月29日一部改正／2013年5月24日一部改正／2017年4月1日一部改正／2018年4月1日一部改正／2018年9月8日一部改正／2022年9月18日一部改正／2023年9月16日一部改正